

新シリーズ②

成長する FITNESS SPA

スパ&フィットネスジャーナリスト 渡辺 真衣



デイスパの衰退、ホテルスパの苦戦の中で、成功している業態として注目を集める『フィットネス・スパ』。そもそもフィットネス・スパはいつごろから、どのような栄枯盛衰を遂げ、現在どのような状態にあるのか。これからフィットネス・スパに参入を検討するうえで、また現在クラブ内のエステやリラクゼーションサロンを経営する方々にとつても、流行や目先の事象にとらわれず、これから5年、10年といった中長期の視点でフィットネス・スパの魅力と可能性を考えてもらいたい。本誌、西尾編集長との企画会議の末、まずフィットネス・スパの成り立ちに焦点を絞り、2回に分けて解説します。

フィットネスクラブの40年史(前編)

―創設期 1960～1970年代―

そもそも、フィットネスクラブという業態自体の歴史は浅く、一般的になってから実質まだ40年ほどで、未熟で発展途上のサービス業であるといえます。フィットネスクラブの原型となる最古のクラブ、Y&AC(横浜カントリーアスレティッククラブ)は1868年(明治元年)横浜の地にイギリス人貿易商らの手によりクリケットクラブとして創立されています。一般の日本人が通うクラブの歴史は1964年東京オリンピックが契機になっており、1965年に民間のスイミングスクールが誕生し始め、1969年TAC(東京アスレティッククラブ)が日本で最初に生まれた会員制総合スポーツクラブとして誕生。その後続々と69年セントラルスポーツ、71年ダイエーレジャーランド、73年NAS、74年ピープル、79年ルネサンス、とクラブを運営する会社が誕生し始めます。70年代前半にホテルオークラのオークラヘルスクラブ、ホテルニューオータニのゴールドデンヘルズスパ、74年に三菱商事100%子会社によって作られた横浜ア

スレティック・クラブアヴァンティなど、入会金を数十万円する高級会員制クラブもこのころ誕生し、健康増進の施設として、またソーシャルクラブとして人気を博しました。もともとスイミングプールを中心に、シャワーやsteamバス、プールサイドにジャグジーなどができ、それに簡単なトレーニングジムがついている形式が多かったようです。欧米のヘルスクラブを参考に作られていた経緯のためか、当時はお風呂ではなく、サウナがスパの中心。マッサージや指圧などのサービスもこのころから提供しており、外部の専門業者に施設が直接委託し、運営していました。

―成長・発展期

1980年代前半～1980年代後半―

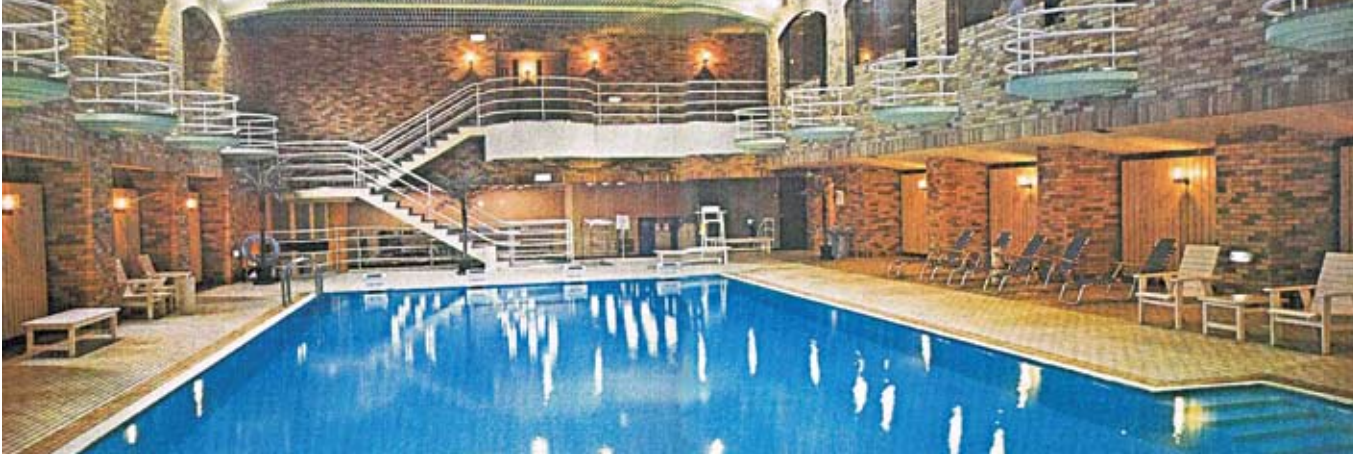
80年代に入ると、エアロビクスとスイミングスクールがブームになり、83年にはじめて『フィットネスクラブ』と名づけた施設をセントラルが新橋にオープン。このころからクラブの大型化・一般化に伴い、お風呂やサウナなど温浴エリアが充実しはじめます。80年代後半から始まるバブル経済はフィットネス業界にも大きな影響を与え、年間200軒を超える総合型のクラブがオープンし、大幅な発展を遂げます。さらにこのころから少子化の流れを受け始めて

いたため、既存のスイミングプールにジムとスタジオを増設し、大人を集客できる総合クラブへの転換が進みます。バブル時の特徴としては、豪華なスパ施設をクラブにつくる高級な会員制クラブが増えたこと。また健康的なイメージの良さから異業種からの大手企業の参入が加速した。87年にサントリーが参入し、「ティップネス」1号店を渋谷にオープン。プリヂェストーンがスパの充実したフィットネススコア・エスパを六本木にオープンしました(閉鎖し、改装後、現在ティップネス六本木)。スパのソフットの面でも87年ごろから西洋の○○セラピーや○○エステ、耳つぼマッサージ、などバブル当時様々なセラピーがクラブの外部からはいつてきました。しかし、結局残ったのは日本人がなじみのあるマッサージとスタンダードのエステだけでした。

この当時の成功したクラブを掘り下げてご紹介します。

〈伝説のクラブ〉横浜アスレティック・クラブアヴァンティ

74年当時は、アヴァンティのあった横浜馬車道駅周辺はまだほとんど建物もない場所でした。このような発展途上の場所に、三菱商事が初の自社ビルとして建物から建築し、資産価値を高め、集客にも繋がるといふ戦略の元、運営会社アヴァンティ株式会社を設立。地下1F、2Fに当時としてはまだ新しいアスレチック・クラブを立ち上げました。79年に三菱商事本体の事業撤退の決断を機にアヴァンティはプリンスホテルに委託され、90年ごろまで運営された後、オーナーが何度か変わり、現在はゴールドジム馬車道店として(株)スポーツ・プロジェクトが経営をしています。当時の面影を残しつつも、施設内容は大きく異なります。左の写真が当時の平面図、大

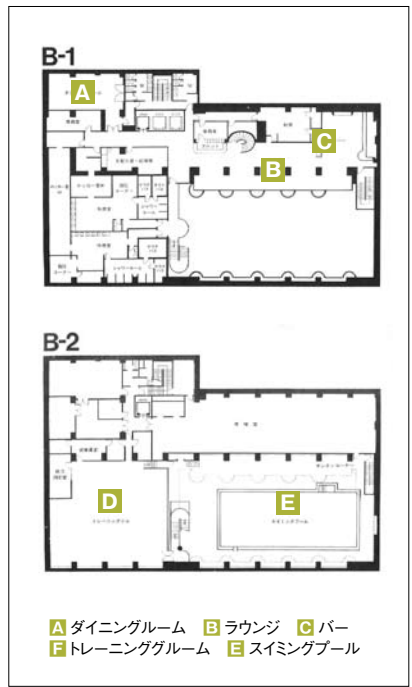


大きく異なる点が、ジムエリア。右ページの写真を見て、現在のクラブと大きく違う点が、マシーンがほとんどなく、その代わりにストレッチのエリアとフリーウェイトのゾーンが大きく占めています。一人一人にトレーナーがつき、運動をしている様子が見えます(右ページ写真参照)。現在、パーソナルトレーニングが流行していますが、35年前のクラブで、高級クラブという相違はありますが、当たり前に行われていたことがわかります。アヴァンティではこのような形式をとっていましたが、低価格で一般向けに作られた茗荷谷のヘルスクラブターナーや

ドウスポーツ晴海などはマシーンが並ぶジムであったとのこと。ジムのアイテムとしても現在と大きな相違はなく、基本アイテムがプール。プールは大変人気で、プールサイドにジャグジーを置き、プールサイドで映画を上映したり、パーティーを開催したり、イベントを行っていたそうです。プールを中心にシャワー、サウナ、ロッキングルーム、マッサージコーナーが設けられていました。高級クラブで社交的な場所であった特徴としてあったのがダイニングルームとバーエリア。専属のシェフとバーテンダーを置き、フレンチ料理とオリジナルカクテルを提供していたそうです。会費は東京との比較で決め、オクタニやオークラのクラブの60%程度、3ランクでA…入会金20万円+月額料金、B…入会金40万円+月額料金、C…入会金100万円+永久に月額無料で設定。約1000名の会員でした。

30年以上前のクラブと現在のクラブを比べ、言えることとして、実は現在のクラブと大きな差がない、と感じませんか？

むしろ、この時代の後からジムとスタジオ



オのエリアが増え、会員間のコミュニティスペースがなくなっていく傾向になっていきますが、近年こそ3、4年で原点復帰とも思える現象として、リラックスやコミュニケーションの取れるスペースが増え、当時と同じように運動と休息のスペース割合が5:5ぐらいになっけています。当時と異なるのが社員の質。当時は社員が現場に多かったのですが、現在、支配人以外全員アルバイトというような店舗も珍しくなく、スタッフの教育レベルやサービスレベルは当時のほうが上である可能性が高いです。「フィットネス・スパ」が新しい業態として近年生まれ、成功しているというのではなく、40年前、フィットネスクラブが誕生したときに、すでにスパを取り込んだ原形が作られており、「運動・休息・栄養」というスパの大原則をトータルで提供する場所として存在していたのです。この当時から30年間、フィットネス業界は成長の弊害として効率化と画一化が加速します。アヴァンティのようなクラブは消えていき、ホテルの高級クラブは現在も残っているものの、当時のような社交クラブとしての機能は薄れています。老舗高級クラブとしては二子玉川のスポーツ・コネクションは現在もそのエッセンスを残し運営されています。パブルを前後し、業界全体が会員の質向上より会員の数の向上へ。社員の質向上より社員のコストダウンへとシフトしていく過程の中で、スパはどうなっていくのか、後編に続きます。



高級クラブで社交的な場所であった当時のパンフレット

スパ&フィットネスジャーナリスト
有限会社ホットマーク 代表取締役社長
渡辺 真衣

「体を温め、元気に、きれいに」をモットーにフィットネス・スパのプランニング・施工会社ホットマークを経営。フィットネス・スパ専門ジャーナリストとして世界中のスパ・フィットネスの最新情報から、日常の小さな温め健康法まで連載中。

〈参考文献〉
Fitness Businessリクルートマガジン
2009年版
「ヒアリング・写真出典」株式会社牛場事務所 代表取締役 牛場靖彦 (横浜アスレティック・クラブアヴァンティ代表取締役)
※写真の複写・無断利用禁止(牛場事務所所有)